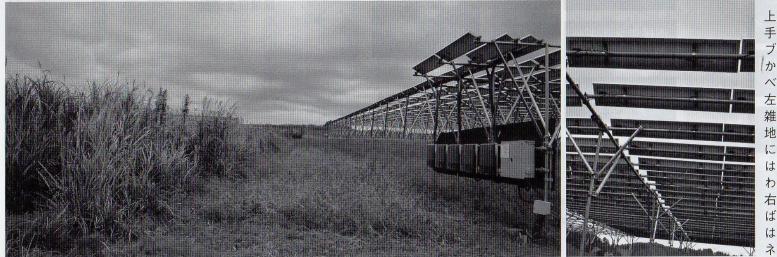


ソーラーシェアリング 農業と太陽光発電を両立させる農業経営



上：メガソーラー施設。手前に設置されたテープルは、毎年11月に開かれる収穫祭などのイベントでも使われる。左：発電施設の脇には、雑草が繁った耕作放棄地がいまも残る。近くにあった不法投棄地ではゴミ除去作業も行なわれた。右：市民エネルギーちはが関わった施設では、スリムタイプのパネルが使われている。

代表」と、椿茂雄さん（現・匝瑳ソーラーシェアリング代表）。環境問題の集まりが出会いの場だった。 東さんは有機野菜やエコ商品の流通に携わっていた。都内でオーガニックショップGABAも開いていた。2011年の福島原発事故のときは、「こんな理不尽なことがあるか！」。募るばかりの危機感。ソーラーシェアリングの考案者である長島彬さんを訪ねたのはそんなときだった。実証圃場での栽培にも関わり、そして確信する——ネガティブなものなし、広めるに値する。

椿さんは匝瑳代々の農家で、郵便局の仕事にも長年携わった。地域の課題を率先して引き受け、地元でも人望が厚い。ソーラーシェアリングの適地を探していた東さんにとって、椿さんとの出会いは決定的だった。椿さんはこういった——ぼくもソーラーシェアリングを匝瑳につくりたい、一緒にやろう。

農業を通じて環境問題に取り組んでいるグループは、千葉県内では鴨川、夷隅、神崎などいくつもある。しかし匝瑳には、同じような問題意識でソーラーシェアリングを展開した事例はまだなかつた。

「手付かずのところに新しいOSをインストールしたい。何もないところ

ソーラーシェアリングのモデルケースに

ろで0を1にする！」（東さん）こうして地域の人たちとの協議が始まること。何より地域の皆が、どうにかしなければと思っていた。自分たちだけでは手立てを探しあぐねていたなかで、ソーラーシェアリングは「希望の光」となっていく。

14年9月、匝瑳第一市民発電所が

売電開始。匝瑳での初号機だった。定格出力30kW、設置面積約850m²。パネルは風に強く遮光率の低いスリムタイプを採用。設置工事には農家の人たちも加わっている。16年1月には、これまで常識だった南向きパネルではなく、東西向き太陽追跡型のスマートターン（®長島彬）を採用したシステムが増設されている。

この第一発電所は、市民出資型パネルオーナー制度の導入例としても注目された。パネル1枚につき2万5000円、売電収益が毎年出資者に還元される仕組みだ。沖縄のホテルでよく見られる客室オーナー制度



左から、匝瑳市でソーラーシェアリングに取り組んでいるThree little birdsの佐藤共同代表、匝瑳ソーラーシェアリングの椿代表、市民エネルギーちはの東代表（写真提供：EARTH JOURNAL）

Part 2

匝瑳——ソーラーシェアリングの郷

いま千葉県匝瑳市が注目を浴びている。「何もない」といわれる田園地帯に、次々と人が訪れるようになつた。農業にも活力がみなぎってきた。ソーラーシェアリングを中心とした地域づくりをレポートする。

匝瑳市。千葉県東部、九十九里浜を擁する人口約3万7000人の町。知名度の低さを逆手にとった「どこにあるかわからない」「読みない書けない」が市のキャッチフレーズにさえなつてゐるらしい。「そうさ」という。2006年に八日市場市など

匝瑳第一市民発電所。2014年9月通電。大豆約800m²、30kW。年間売電額約250万円（36円/kWh）、設置費約900万円。※16年1月にはスマートターンを採用した増設分が通電開始。

匝瑳メガソーラー第一発電所 17年3月通電。大豆+麦3.2ha、1MW。年間売電額約5,400万円（32円/kWh）、設置費約3億円。

が合併して誕生した。
全国屈指の農業産出高を誇る千葉県にあって、匝瑳は水田が広がつているものの、有名产地となつてゐるわけではない。そんな匝瑳が、いま大きな注目を集めはじめている。

ソーラーシェアリング認可数の都道府県別トップは千葉県の204件（18年9月現在）。このうち匝瑳市は25件で、八街市に次ぐ（全国市町村別では第5位）。ソーラーシェアリングの先進地域なのだ。

沿岸部からちよつと内陸に入ると、小高い山林を取り囲むように谷地田が開けている。市内北部に位置する旧農村地区。山を切り崩してつくつた農地も多い。これが匝瑳ソーラーシェアリングの舞台だ。

そんな状況が一気に変わる。そこには人と人との出会いがあつた。東光弘さん（現・市民エネルギーちは）

ゼロをイチに！ 匝瑳に灯った希望の光

豊和地区の瘦せた農地では、タバコなどが生産されていた。それも15年ほど前にはほとんどやめられ、耕作放棄地が増えていた。一時は野立てソーラー建設の話がもあつたこともある。しかし農振区域だつたため、農地転用の許可是当然ながら下りりなかつた。

そんな状況が一気に変わる。そこには人と人との出会いがあつた。東光弘さん（現・市民エネルギーちは）

ソーラーシェアリング

営農と太陽光発電を両立させる農業経営

寺本さんは飲食業をやっていたが、ソラシエア稼働を機に事業を離れた。自身は10haでコメをつくつている。地域内の麦や大豆の収穫は、ほとんど受託。お父さんもT.L.B.参考者のひとりで、コメ・麦・大豆を合わせて6ha。乾燥調整機を持ち、麦と大豆は全量加工用、農協には出荷していない。

「近所の大豆畠を見ているので遅がわかります。今月の台風のときに、他の畠では倒伏が目立つたのに、ソラシエアでは倒れませんでした。ただ、葉物野菜はバネルから落ちる雨だれの影響を受けやすいので、むずかしいかもしれません」（共同代

だらう。
高さ3mパネル下の作業でもほと
んど支障はない。むしろ支柱が作業
の目印にもなる。支柱間隔は4~5
m。農作業の都合に合わせて試行錯
誤しながら設計した。30馬力トラク
ターを使っているが、60馬力クラス
でも可能のこと。刈り取り幅は2
mくらいまで。
作物の生育にも問題は出ていない
い。パネルの日陰で地温が下がり、
収量が上がることもある。しかもパ
ネル下は涼しいため、真夏の作業も
楽になる。

木村農作業体験、市民農園、農林牧泊、園芸療法などが企画されている。計画の進行にしたがつて、さらに多くの地域住民が関わってくることになるだろう。

高坂さんは「ダウンシフターズ」の著者としても知られる、環境N.P.O.「畠堀プロジェクト」を立ち上げ、10年ほど前から農業体験を都市住民向けに紹介する活動に取り組んでき

加工販売に向けた取り組みにはすでに始まっている。今年1年10月には6次化やパークファーム事業を手掛けた会社として、農業生産法人(㈱Re)を東さんと高坂勝さんが設立した。



TLB共同代表の齊藤超さんと寺本さん、東さん（左から）



6次化に向けたランチミーティングのひとこま。

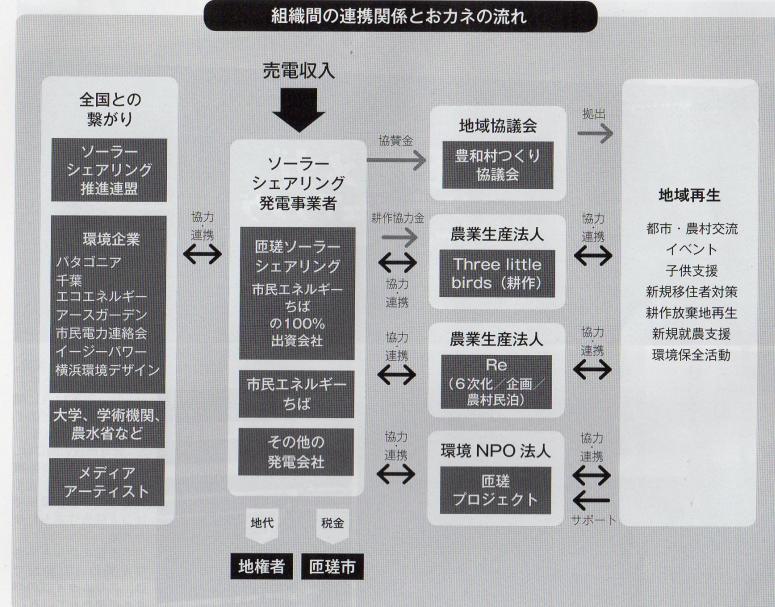
近仁を継ぐ
ソランエアの郷

でした。いまはまだ上づくりをしている段階ですが、何もなかつたところにソラシアアがてきて、人も集まつてくる。話題になつたことで活力をもらいました。農業へのモチベーションもあがっています」(寺本さん)
今後は健康食品として評価の高い有機ゴマなども栽培候補としてあがつている。選別などに手間はかかるが、福祉作業所との連係も視野に入ってきた。

かには随時に移住した人が何人もいる。その人たちがソラシエアにも関わりはじめた。

取材当日、たまたま事務所ではR会議が開かれていた。ちょうどお昼時、テーブルには食事が並ぶ。メニューは地元産を使った自家製玄米ごはん、浅漬けキムチ、ナムル風野菜の和え物、肉と野菜の汁物など。自然食レストランで食べれば何千円かかるところを、ランチメニューで

と。香りの強さを特色とするヒュウガはコーヒーメーカー用にOEM生産してもらい、Reのブランドとして販売する可能性もある。



Three little birds の若手農業者たわ

認証を受けた大豆と麦を栽培している。主な大豆の品種はヒュウガ。多収種が普及するなか、地元で細々と生産が続けられてきた品種だ。

地権者には地代1反当たり2万円。周辺の水田の相場は高いところでも2万円にする。畑はもっと安い。2全を基

東京環境保全マーリーの曲名にちなんだむとか。ひとつの太陽を、三羽の小鳥「エヌルギー」で資本化する。物語は、この「エヌルギー」が分け合う「行きかう人」の意味が込められているらしい。ソラシード・バンバーたちの名刺には「ソラシード・アーティスト」と肩書きが記されていた。それに倣つて、以下ソーラー・シエアリングを「ソラ・シエア」と略させていただこう。

TLBには、市民エネルギーしばら半端肥り難い収益性の固定利回りは、年間合計300万円支払われる。収穫量には関係なく、原則的に年間合計300万円支払われる。